

# 教育の中身を変え、学校を選ばれる環境に置く改革

若月秀夫氏 品川区教育委員会教育長 / 中央教育審議会義務教育特別部会委員

学校選択制、小中一貫校の開設など先進的な取り組みで全国的に注目される東京都品川区。教育委員会教育長・若月秀夫氏は日本の義務教育にどのような問題意識を持ち、どのような思いを持って改革を進めているのか。



point

日本の公立学校の変革のためには日本の公立学校は発足以来、世間の荒波を避ける壁を学校の回りに張り巡らせ、法律で教員の身分を保障した。ところが、そこはいつしか安穏とした閉鎖的世界になってしまった。教育の中身を変える。厳しい環境に置き直す。その二つを同時にやらなければ、浮世離れた学校の体質、教員の考え方の本質は変わらない。



Basic

品川区教育委員会『品川区小中一貫教育要領』(講談社・2005)  
若月秀夫[ほか]著『学校教育を変えよう』(自由国民社・2004)  
品川区教育委員会ホームページ <http://www2.city.shinagawa.tokyo.jp/jigyo/06/>

## 子どもたちの声なき声

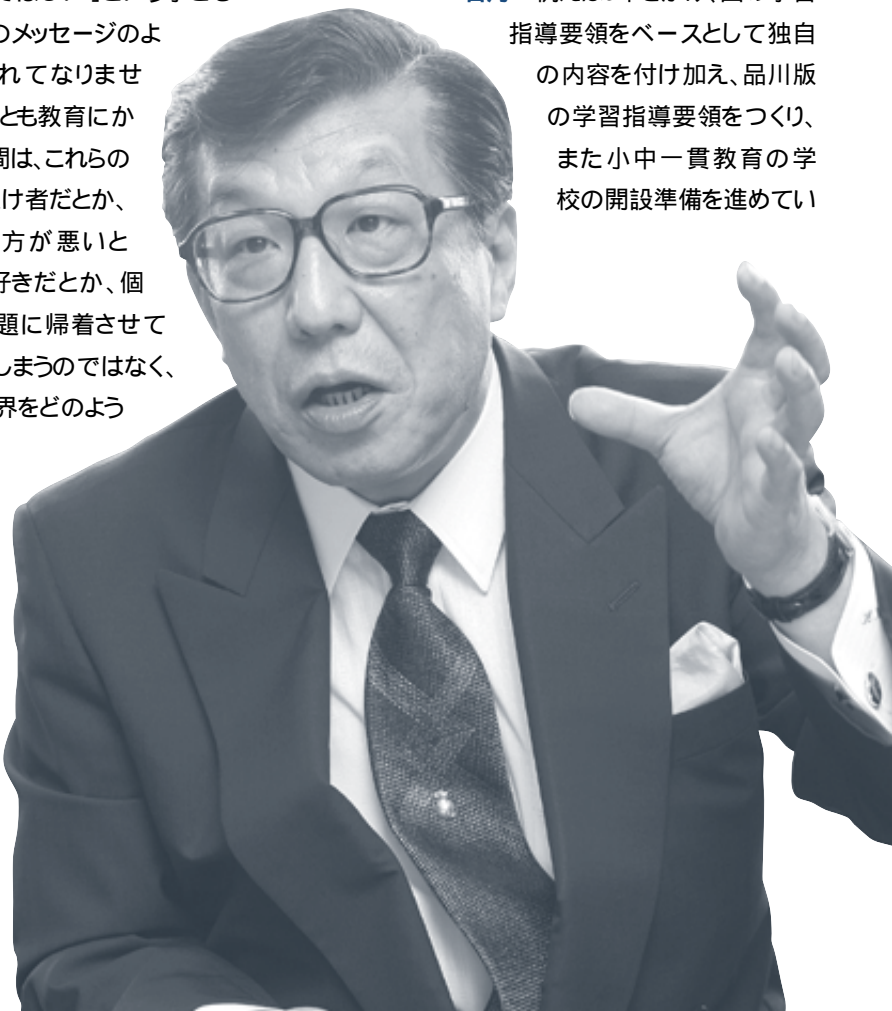
習熟度別授業、小中一貫校の開設、学校選択制など、品川区の先進的な学校改革は全国的に注目されています。改革をリードされている若月教育長に、まず、日本の公立学校の義務教育における問題点について、お考えをうかがいたいと思います。  
**若月** 教育には二つの側面があります。一つは、世間とか社会といった「我々の世界」の中で役割を担い、使命感を持ち、立派に責任を果たしていく人間を育てるという側面です。もう一つは、自分自身を磨き、自らの人生を充実させる、自分という「我的世界」を確立するという側面です。日本の義務教育を振り返りますと、かつての富国強兵の時代、戦後の高度経済成長期から今日に至るまで、前者の「我々の世界」でいかに生きていくかという側面にバイアスがかかっていました。それを一概に悪いとは言いません。発展途上にある時代、国の将来を考えれば、むしろ必然であったかもしれま

せん。しかし、「我的世界」の充実という側面では、子どもたちの要求に十分に答えてこなかったのではないかと。社会問題となっているさまざまな事象、不登校、学級崩壊、中途退学者の増加、フリーター、ニート、それらの現象が私には「もっと『我的世界』に目を向けてほしい」という子どもたちからのメッセージのように思われてなりません。少なくとも教育にかかわる人間は、これらの現象を、怠け者だとか、親の育て方が悪いとか、遊び好きだとか、個人的な問題に帰着させて片付けてしまうのではなく、自分の世界をどのよう

に充実させていけば良いのか分からずに不安を感じ、自分が拠って立つ場所を認識できない子どもたち、若者たちのメッセージ、声なき声として受け止めるべきでしょう。

かかる認識を持って学校改革を進められているということですね。

**若月** 例えば3年をかけ、国の学習指導要領をベースとして独自の内容を付け加え、品川版の学習指導要領をつくり、また小中一貫教育の学校の開設準備を進めてい



ます。今、学力低下が問題になっていますが、これまでの義務教育は有り体に言えば、優秀な子どもを遅れている子どもに合わせていた。「それは止めよう」ということで、小中一貫教育では、習熟度別のステップアップ学習を実施します。ある科目で飛び抜けた才能を示す子どもがいれば、中学生でも大学の教材を与えるなど独自のカリキュラムで教える。また、遅れている子どもがいれば、中学生でも小学校の勉強をやり直せる。そのような一人ひとりの子どもの能力、適性、持ち味を伸ばせる環境を用意します。

平等論からの反対意見は出ませんでしたか。

**若月** 「エリート教育ではないか」、「特定の子どもの能力を伸ばすのは税金の使い方としていかなものか」と批判する教育学者も多数います。その一事をもって分かるように、日本の教育界には妙な公平感が蔓延しています。競争を否定し、格差や序列を否定する。相対評価や偏差値を毛嫌いし、習熟度別学習や個別指導を「優越感、劣等感を助長する」と敬遠する。このように教えれば、どの子も同じになる。そのような誤った学習観はそろそろ払拭すべきでしょう。品川区の教育委員会は「みんな一緒」という牧歌的な教育観は持ち合わせていません。機会の平等が大事なことは指摘されるまでもありません。しかし、結果の平等まで当然の権利として求めるような態度は間違いです。子ども一人ひとりの個性、持ち味は違う。個々の能力には歴然とした差がある。ただし「能力が高いから良い、低いからいけない」ということではない。また、勉強だけが唯一の価値基準でもない。例えば、品川区には江戸切り子の伝統がありますが、教えればすぐうまくなる子がいます。それも立派な能力です。個々の持ち味や能力をできる限り伸ばすことこそ、行政がステークホルダーのために果たすべき責務です。そして、個々の子どもの能力を思い切り伸ばし、我の人生を充実したものにします。それが寄り集まって、「我々の世界」の発展に寄与

してくれば、これに優ることはありません。

平等の名の下に、子どもの才能をスポイルしてきたということですね。

**若月** 妙な公平感で個性や才能を封殺してきた結果、子どもたちはやる気をなくすか、公立学校を見限り、塾で学ぶようになった。公立学校が信頼されていないのは、「自分の個性・持ち味を伸ばしたい」、「自分の人生を充実させたい」という期待に十分応えてこなかったためだと思うのです。

## 「ならぬことはならぬ」

能力に応じた教育によって、「我の世界」を充実させるということですね。

**若月** もう一つが心の面です。「『我の世界』を充実させることが足りなかった」と言うと、一部の教員から反論が出るかもしれません。「私たちは個人を自由にしてきた」と。では、その結果はどうなったか。人を傷つけることに抵抗感のない子どもがいる。道に座り込んだり、電車で化粧をしたりする子どももいる。つまり、自己中心の傾向が極度に強まった。自由と言いながら、結局、甘えと自己中心を助長しただけではないのか。私に言わせれば、ミーゾム、場合によってはエゴイズムの助長で、「個の確立」でも「我の世界」の充実でもありません。自由や権利という概念をあまりに絶対化したため、公共の利益を軽視する風潮を招いた。そのような反省から、品川区は道徳の教育と特別活動の一つにして「市民科」という新しい教科をつくりました。これは、自分の人生を充実させていく前提となる訓練を行うものです。

心の教育のあるべきかたちはどのようなものとお考えですか。

**若月** 数年前、ラジオの深夜番組で、高校生と一晩中討論する番組に出ることがあります。そこでは「自殺は是か非か」というテーマで議論が行われた。高校生たちがさまざま理由を持ち出し、主張するのを黙って聞いていましたが、最後にアンカーが「まとめてください」と言うので、私は番組の姿

勢そのものを批判しました。「自殺が是か非か」というテーマを設定すること自体、今の教育が抱える大きな誤りを如実に示しています。自殺はいけない。『なぜ』と問われても、『理屈はない』と言えば良い。仮に、是非を議論して論理的に負けたら、私は彼の自殺を容認しなければならないのか。そんな馬鹿な話はないでしょう」と。このエピソードが如実に物語っていますが、戦後の教育は、理屈以前に人としてやってはならないこと、人としての理(ことわり)というものを大人が毅然と示してこなかった。「古い」と言われるかもしれませんが、会津藩旧藩校の日新館には優れて明確な誓いがあります。「ならぬことはならぬものです」、これを言う勇気を今の教員は失い、親も失った。そして子どもの「なぜ」にたじろぎ過ぎる。「理由などない。これが人の道だ」と押し通す気迫に欠ける。「かくかくしかじか、だから命は大事だ」と説得するのではなく、「人の命が大事なことに理由などない。とにかく人を傷つけるな」で良いのです。品川区の市民科では、理屈以前に人として守らなければならないことを教えます。それを「管理教育」、「調教ではないか」と指弾する「民主的教師」がいるかもしれません。では、彼らの言う心の教育の結果はどうだったのか。「戦後の教育界はすべて理屈で、順序立て、話して分からせるのが民主的教育だ」という科学的思考万能論をとった。客観的で理論的な組み立てが教育の基本であることは否定しませんが、人格形成にまで科学的であるべきだという発想を取り入れた挙げ句、「説明し、理屈で納得させなければ教育ではない」という幻想に陥ったことが大きな誤りです。

成長の過程に相対化した価値観ばかり与えれば、揺らいでしまうということですね。

**若月** おっしゃる通りです。人として守るべきことを、まず大人がきちんと教える。時に子どもは反発するかもしれない。それを積み重ねながら、次第に自分なりの価値観をつくっていくのが人格形成です。ところが

国民・社会が望む義務教育の  
規制改革が前進!

～次は、自治体・校長のやる気ひとつだ!!～

「それぞれ自由に生きましょう。みなさんにはその権利があります」と言われるだけ。不登校も二つ三つ何を座標軸に生きていけば良いのか、手がかりを与えてくれない」、そのような悲鳴ではないでしょうか。

とりわけ日本社会は宗教による規範性が希薄な分、何らかの座標軸が必要ですね。

**若月** 日本の教育界では、宗教教育も避けられます。「真理を求め、より善い生き方を求め、先人が悠久の時をかけ、価値観、人生観、人間観として築いてきたものの考え方であり、知恵の結晶である」という客観的な見方ができない。また、価値体系として最も客観性のあるのが法律です。多くの人間の英知をルールのかたちにまとめたものであり、その根底には哲学が流れており、それを拠り所に物ごとを判断することができます。教育界では、そのことが理解されない。法律を「単に人間を規制するもの、争いを処理するもの」という程度にしか見ていない。「法律で人権はこのように保障されている」と具体的に教えれば良いのに、抽象的で情緒的なことばかり言っている。

品川区はキャリア教育にも力を入れ

られています。

**若月** 教育界の世界観、人間観、社会観はあまりに牧歌的過ぎます。子どもたちは、これから世間の荒波の中で生きて行くのです。ところが、社会の現実を教えたがらない。そのため、学校で学ぶことと学校を出てから必要になることが乖離している。「それを近付けよう」という品川区の試みが経済活動の教育の「ファイナンスパーク<sup>1</sup>」であり、企業などで子どもたちが活動する「チューデント・シティ(右頁・資料1参照)」です。そこで、伝票の字を丁寧に書かないと間違えたり、正確に計算できないと損をしたりする、といった経験を通して、勉強の大切さを体感することができます。私が子どもたちに知ってほしいのは、「掛け算九九は無味乾燥だが、試験のために覚えるのではない。『我々の世界』で生きていくとき、こうしたスキルは不可欠なものだ」ということを実感することなのです。日本の教育界には、アカデミックなものが学校教育で、実学的なことは一段低いというおかしな見方がある。それも明らかな間違いです。

## 学校選択制の意義

教育に成果や競争という要素を取り入れるとき、どのような反応がありましたか。

**若月** 教育の世界には「教育というのは性急に結果を出せるものではない。10年、20年、長い時間が経って初めて成果が出る。よって、企業のような成果主義は不適當」という発想がありますが、私に言わせれば、その発想自体に、教育界の胡散臭さを強く感じるのです。呼ばれたら「はい」と返事をする。電車やバスで高齢者に席を譲る。そのようなことは明日にでも結果が出せる。掛け算も分数も分からない中学生が増えているのに、「10年先」などと悠長なことを言っているから、世間から「学力低下」の謗りを受けるのです。公教育の世界にある世間の理屈が通らない特殊性、非常識さ、社会的幼稚性を打破しなければなりません。

それらは何に起因するのでしょうか。

**若月** 一般の人、あるいは民間企業は、社会の中でいかに自らの場所を確保するか、一生懸命知恵を絞り、日々努力をされています。ところが、日本の公立学校は明治5年の発足時からそのようなかたちで存在していません。かつては国民の間に「教育というのは貴い営みであり、人間の成長、国の将来のためになくってはならないものだ」という意識がありました。そのように大切な仕事をする教員が、時々景気や時勢で生活が不安定になり、全身全霊で教育に打ち込めないようになっては困る。そこで、世間の荒波を避ける壁を学校の回りに張り巡らせた。法律で身分保障をし、手厚く処遇した。ところが壁に守られ、そこはいつしか安穏とした閉鎖的世界になってしまった。それに対して現在、外の社会から疑問の声が上がるようになった。「壁をつくり学校を守ってきたが、中でやっていることはどうもよく分からない。学力低下、不登校、いじめ、ニート、いったいどうなっているのか」と。一般市民は納税者、ステークホルダーとしての意識も高まり、「壁があるから声も届かないし、声も聞こえてこない。いっそのこと取り払うべきだ」となった。品川区が実施した学校選択制が、まさにそれに応えるなものです。努力をしようがしまいが、学区の子どもは自動的に来る。そのようなぬるま湯から学校を引き出し、結果が出なければ、親から見捨てられるという当たり前の社会的環境に置き直した。これまでも教育改革は行われてきましたが、庇護された環境を温存したまま、中身を申し訳程度にいじるだけでした。教育の中身を変える。厳しい環境に置き直す。その二つを同時にやらなければ、浮世離れした学校の体質、教員の考え方の本質は変わりません。

競争的な環境が意識変革をもたらすということですね。

**若月** 品川区では、全ての区立小学校の6年生を対象に学力定着度調査<sup>2</sup>を行い、結果を情報開示していますが、ある小学校で



1 ファイナンスパーク：品川区教育委員会が、区立城南中学校に設置。2005年6月11日開講。区立中学生が、架空の街で食べ物を買ったり住宅ローン組んだりすることにより、生活設計についての体験学習をする試み。実際の空き教室を改装してブースをつくり、銀行やスーパー、不動産会社など本物の大手企業十社あまりが出店した。今年度は「総合的な学習の時間」に区内18中学校の2年生の生徒たち(約5,000人)がファイナンスパークを体験する。

2 学力定着度調査：小学校卒業時に「読み」「書き」「計算」など基礎的な学力の

定着度を計る品川区独自の試み。平成15年度より実施。実施教科は国語・算数の2教科で、対象は小学校6年生。調査実施後、各小学校は調査結果の分析および考察を行い、自校の課題を明らかにした上で、今後の指導についての『態度表明』として、何を、いつまでに、どのような方法で、どの程度の成果を出すのかを具体的な数値と明確な根拠とともにホームページで公表する。  
参照、品川区教育委員会ホームページ「品川区独自の学力定着度調査」  
<http://www2.city.shinagawa.tokyo.jp/jigyoku/06/sidouka/p21.htm>

資料1 スチューデント・シティ



子どもたちは、自分で選んだ会社で経営者の立場となり、商品の販売や営業を行ったり、消費者の立場となり計画的に物を買ったりするという活動を交互に体験しながら、税の仕組みや会社同士のつながり、収入と利益・給与・支出の関係などを学び、社会とは人々がそれぞれの役割を分担し、お互いに支えあい補い合いながら成り立っていることを学ぶ。

出所：品川区教育委員会ホームページ「スチューデント・シティ」  
(<http://www2.city.shinagawa.tokyo.jp/jigyoo/06/sidouka/p23.htm>)

印象深い出来事がありました。そこでは校長以下、先生方は頑張っているのですが、どうしても区の平均を下回る成績しか出ない。昨年3月の卒業式で、6年の学年主任がこのようなことを語ったのです。

「先生たちは一生懸命教えてきたつもりだが、君たちに全てを教えた実感がない。今日は卒業式だが、君たちは3月31日までこの子どもだ。そこで、明日26日から自主的な勉強会を開きたいと思う。春休みだから強制はしないが、勉強し直したい人はぜひ来て下さい。先生たちは待っています。」

それを聞きながら、校長は感激のあまり涙を流されたそうです。これまで先生たちは、春休みとなれば海外旅行に出かけたりしていたが、最後の最後まで小学校としての責任を果たそうという意識が生まれてきた。その話を聞いて、私もその小学校に駆け付け、先生方に「敬服しました。仮に成績が上がらなくても、みなさんは胸を張ってください」と申しあげました。教育について議論すると、すぐ「意識改革が必要」と口にする方がいる。しかし、具体的な内容が伴わなければ、それは抽象的、形而上学的教育論であり、単なる言葉遊びでしかないのです。私が学校に求めた「意識改革」とは、こうした教員の主体的発想や熱意の変化だったのです。

一連の改革を進めるに当たり、国との関係が難しいところはありませんか。

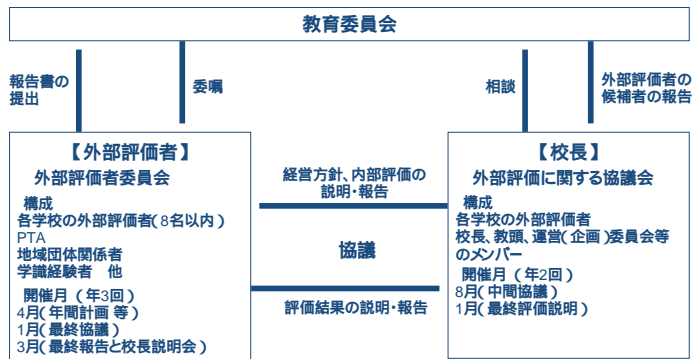
**若月** 「国の縛りがきつい」、「教育委員会が学校を締めつける」、そのようなステレオタイプな言い方は、自らの不作為のエクスキューズに使われている気がします。品川

区の学校選択制にしても、国は一時心配したようですが、最終的には応援してくれました。また、品川区は構造改革特区に指定されていますが、その仕組みを使えば、かなりのことができます。少人数学級や講師の使い方の決まりがあると制約してきたのは、むしろ東京都の方でした。都の立場も分かります。「品川区ばかりでなく、全部の区が良くなってもらわなければ困る」ということでしょう。都は「人事異動も都の決めたことに従ってほしい」と言ってきましたが、私はお断りしました。内申権は教育長である私にありますから、強制はできないわけです。一定期間で異動させることにはいかなる教育論的、経営論的根拠があるのかを問いかけてました。「何年か経てばどうせ異動してしまう」、それが各教育委員会の無責任な体質を生む温床です。普通は駄目なら学校を替えるが、品川区はそうではない。その学校が良くなるまで異動させません。それが責任というものです。そうなれば、誰も必死に頑張るものです。そのような学校に対しては、教育委員会も協力を惜しみません。

地域運営学校についてはどのようにお考えですか。

**若月** 教育委員会がすべてを牛耳るより、地域運営学校、コミュニティ・スクールがしっかり機能するのが理想ですが、それをいさなり求めても難しい。品川区はそこに達するためのステップを踏んでいるところです。学校選択制や外部評価者制度(資料2参

資料2 外部評価の仕組み




出所：品川区教育委員会ホームページ「外部評価者制度」  
(<http://www2.city.shinagawa.tokyo.jp/jigyoo/06/sidouka/p20.htm>)

照 光そのステップのひとつです。教育委員会が財政面、マンパワーの面から支援しつつ、子どもたちの「我的世界」を充実させ、「我々の世界」できちんと責任を果たせるバランスのとれた教育を実現していく。その中で教員が理念を持ち、地域の住民が学校を見る目を持って初めて、理想が実現できるでしょう。

品川区教育委員会教育長 / 中央教育審議会義務教育特別部会委員

**若月 秀夫(わかつき ひでお)**

1945年生まれ。1972年青山学院大学文学部教育学科卒業。都内の小学校教諭から、1984年より東京都教育庁、品川区教育委員会の指導主事を経て、1992年都内小学校長。1994年より、品川区教育委員会指導課長、東京都教育庁主任指導等を歴任し、1999年より現職。中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員、同教育庁行政作業部会主査を歴任し、現在、中央教育審議会義務教育特別部会委員、文部科学省大学・大学院における教員養成推進プログラム選定委員会委員。経済産業省シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会委員。東京都福祉保健局次世代育成支援懇談会委員。スクールリーダー人材育成の専門職大学院に関する検討会委員。東京工業大学附属科学技術高等学校スーパーサイエンススクール研究開発運営指導委員。日本教育経営学会会員。主な著書に『学校教育を変えよう』(共著 / 自由国民社・2004)、『通知表文例事典』(共著 / ぎょうせい・1994) 論文に「教育改革と地方分権・規制緩和」(東京財団『日本人のちから』Vol.15)、「小中一貫校の構想は変わらない公立学校を変える経営論的試みである」(『日本の論点2004』文藝春秋)などがある。



若月秀夫「小中一貫校の構想は変わらない公立学校を変える経営論的試みである」(『日本の論点2004』文藝春秋) 同「教育改革と地方分権・規制緩和」(『東京財団』日本人のちから』Vol.15)

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

[h-bunka@lec-jp.com](mailto:h-bunka@lec-jp.com)

国民・社会が望む義務教育の規制改革が前進!

～次は、自治体・校長のやる気ひとつだ!!～